

## 書評



入口善久著

## 『蘆花と水俣』

自由塾、2018年

評者 矢野 治世美

熊本学園大学社会福祉学部

徳富蘆花は、1868（明治元）年10月25日（旧暦）、芦北郡の水俣手永浜村（現熊本県水俣市）に生まれた（本名は健次郎で、蘆花の号は1885年ごろから用いているが、本稿では煩雑を避けるため蘆花で統一する）。1885（明治18）年に熊本でキリスト教の洗礼を受け、しばらく伝道に従事したのち、1889（明治22）年に上京して兄蘇峰が経営する民友社に入社し、翻訳や短編小説などを発表するようになった。1900（明治33）年、陸軍大将大山巖の娘をモデルにした長編小説『不如帰』がベストセラーとなると、小説家として世間に名を知られるようになった。

本書は、「はじめに」に「蘆花について限られた紙面でなるべく正確にお伝えするために、蘆花の作品から原文を多くそのままお示しする内容とした」とあるように、著者の入口善久氏が引用した蘆花の作品に解説を付すという体裁をとっている（旧字体の使用も「蘆花の文章をなるべく正確に伝えたい」という著者のこだわりによるものであろう）。

著者による蘆花評は「自然を愛し、土に生きようとした蘆花。地上の人間の野望の世界をよそに、高い見地からよりよく生きることの意味を私たちに教え続ける。その作品は一貫してヒューマニズムが感じられる」、「蘆花の文章は、生きる実感に基づいて書かれている。繊細かつ具体的な細部の描写に優れ、そこに真実のきらめきを見ようとするものであり、読む者を魅了する」という文章に端的に示されているといえよう。

本書は全8章で構成され、巻末には蘆花の年譜が収録されている。第1章から第7章は蘆花の作品の紹介と解説、第8章は水俣の通史となっている。紹介・解説については、最初の単行本である『青山白雲』（1898年）をはじめとして、小説では『不如帰』（1900年）、『思出の記』（1901年）、随筆集では『自然と人生』（1900年）、『みみずのたはこと』（1913年）、『死の蔭に』（1917年）、および第一高等学校での講演録「謀叛論」について特に紙面が割かれている。

評者は歴史研究が専門で、蘆花の作品に対する著者の文学的評価が妥当かどうか判断することは難しい。むしろ歴史資料として蘆花の作品、特に随筆に関心がある。

年譜によれば、蘆花は1871（明治4）年に家族とともに詫麻郡大江村（現熊本市）に引っ

越したが、その後何度か水俣を訪れている。1913（大正2）年に先祖の墓参のために訪れた際の様子『死の蔭に』に記されている。この時、蘆花は日奈久から蒸気船に乗り込み、丸島から水俣に上陸した。

此処〔水俣一評者注〕は西北に向ふてやゝ打開け、人家が大分、煙突なども見える。船着きは旧に仍つてよくない。十歳の夏上陸した同じ丸島から上る。

日がやゝ傾いた。居合はす車三台をせき立てゝ、昔の塩浜の面影も変り果てた人家つゞきを町へ急がす。船から見えた大きな煙突、煉瓦の建物は、カアバイトの工場さうな。それを左手に見つゝ、水俣川の川口近い土堤に出て永代橋を渡る。川に背いて寺が見える。近年まで其処の隠居として叔母の生きて居た源光寺である。橋を渡つて、橋詰の砂糖屋旅館に手荷物を抛り込み、直ぐ其車で墓参に出かける。祖先の墓は小半里も北の山手、字牧の内にあるのである。

文中の「カアバイトの工場」は、1908（明治41）年創業の日本窒素肥料株式会社の水俣工場のことである。「川に背いて」見える寺は源光寺であるが、1934（昭和9）年に完成した水俣川改修により現在は川には面していない。永代橋も跡地が残るのみで、蘆花が実際に見た水俣と現在の水俣の環境の違いがよくわかる文章である。

『死の蔭に』には、「水俣は過去のものになったが、己が少年時代青年時代の一部を永久に預けてある此海此山此郷を余は決して忘るゝことは出来ぬ」とあり、水俣は蘆花のアイデンティティの一部を成していたと考えられる。自伝的小説の『思出の記』で、主人公の慎太郎が友人・松村の祖父の隠宅を訪れる場面は、蘆花をかわいがっていたという祖父・美信の隠宅の情景をそのまま描写したものだという。

松村の隠宅は実にいい場所だった。川じりに築き出して、三方は水、裏は麦畑に櫛の木が七八本、高潮には屋敷の三方さながら水に浮いて、石垣の上から釣りもできる、白帆の往来も座敷から手に取るようにながめられる。

美信の隠宅を囲んでいた洗切川は1930年代に埋め立てられ、現在は石垣の一部が残るのみということである。現在、隠宅跡の近くには「蘆花公園」があり、その向かい側に水俣学現地研究センターがある。現地を歩く際は、本書で紹介された「蘆花が見た水俣」を参考にしたい。